

第79回総会特別講演

結核の比較文化史的研究

福田 真人

キーワード：結核，歴史，ロマン化，佳人薄命，美，天才

1. なお新しい病気：結核

結核の歴史は、人類と共に古い。結核は今日もなお世界中で蔓延している、もっとも恐るべき慢性伝染病である。

医学の著しい発達にもかかわらず、今日なお世界で年間300万人以上が死亡する（新しい患者が年間870万人生じていると言われている）この病気は、なぜすっかり治癒し、予防され、人間世界から駆逐されないのか？

1882年にドイツの細菌学者R. コッホ (Robert Koch, 1843-1910) が結核菌を発見し、1944年にアメリカのS. ワクスマン (Selman Abraham Waksman, 1888-1973) が結核特効薬としての抗生物質ストレプトマイシン (SM) を発見したにもかかわらずなお結核は猛威を振るい、猖獗を極めている。WHOが「直接観察治療短期コース」(DOTS, Directly Observed Treatment, Short-course) を唱導し、治癒率が向上しても、問題はなお消滅するどころか、ますます複雑になっている。その原因として挙げられているのは、

- ①薬剤耐性菌の出現による治癒の困難化
- ②教育，社会環境の変化によって生じた医師による結核の診断の困難さの出現
- ③日和見感染あるいはエイズ等によって生じる免疫低下による感染の増大
- ④職住環境の変化による感染の拡大（気密化と感染の拡大など）
- ⑤食事あるいは痩せるためのダイエットがもたらす身体弱体化
- ⑥結核の軽視，あるいは結核患者およびその家族の病氣治療への非協力的態度

等々。

しかし、新しい希望もないわけではない。先端医療としての遺伝子治療の応用として、結核の予防や治療を目指す「DNA ワクチン」の開発が急ピッチで進行している。「結核非常事態宣言」が出され、より広範囲な注意と警戒がいきわたるようになったこともある。

2. 結核の歴史

それでは結核の歴史とはどんなものであるのか。

結核を抑制しようとする医学，社会との戦いの現実を如実に認識すると共に、もう一方で、長い結核，医学，医療の歴史をたどることは、今日の医学，あるいはそれを取り巻く環境を考える上で少なからず参考になるであろう。

たとえば今日一般に結核という用語を取ってみただけでも、「肺癆（労咳）」、「肺病」，「結核」と大きく言って3段階の用語変化を経たこの病気は、その名称ごとの発展過程と意味付けがあった。（英語でも，[phthisis] - [consumption] - [tuberculosis] という変化があった。仏，独，伊語もほぼ同様。）

明らかに宗教的儀式的意味合いが濃かった医療から、医学を目的にした病院での治療への過程は長かった。しかし、とにもかくにもギリシャのヒポクラテス (Hippocrates, 460-375BC) が、宗教と科学を分離し、神殿での治療が少なくなった。そこから今日のサナトリウムの原型ができた。ローマも、それ以降も、大した変化はなかった。むしろ、ローマのガレノス (Galen, 130-200AD) の医学思想がその後のヨーロッパを長く覆ったのは残念なことだった。

事情は東洋でも変わりなく、医学古典が長い間勢力を

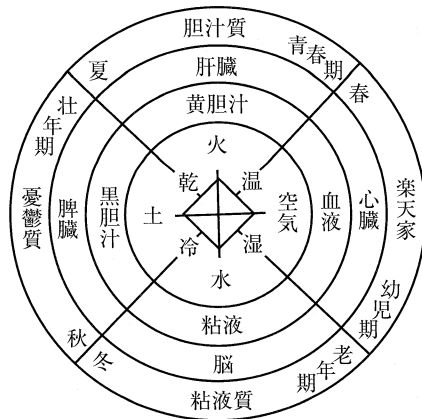


図1 四体液生理学説の図式

(福田真人, 「結核という文化」, 中公新書, 東京, 2001, 29)

保った。たとえば中国の医書『傷寒論』(紀元2世紀頃)は、その後日本の平安時代から江戸時代を通じてもっとも大切な医学書だったが、アラビアのアヴィセンナ(Avicenna, 980-1037)の『医学正典』(11世紀)もガレノスの考え方を後世に伝え、彼の思考を500年にわたって持続させた。

西洋の、四体液生理学説(Humoral doctrine)(図1)は医者に瀉血(phlebotomy, 放血 bloodletting, 刺絡 venesection)を施させ、それはもっとも重要な治療法だったが、診断に用いられたのが尿(尿視法)や唾であった。一方、東洋では鍼灸が主流で、「気」の流れを知る触診(脈診)がもっとも重要な診察法だった。

しかし、コッホによって結核菌が発見されるまでの長い間は、結核の真の原因は不明だった。それゆえ、医者はあらゆる可能性を考えた。瘴気(悪い空気、動物の死骸や地球の中からのガス等)説、鬱屈した精神状態、欲求不満、過度の集中、過剰なダンス、紅茶、珈琲、過度の房事、薄い衣服等々、あらゆる生活習慣がその原因と考えられた。

イタリアのフラカストロ(Girolamo Fracastro, 1478-1553)は、目に見えない病芽(seminaria)を考え、英国のマーテン(Benjamin Marten, 1704-82)は極小動物(animacula)を考えた。フランスの軍医ヴィルマン(Jean Antoine Villemin, 1827-92)は、軍隊での結核の激しさを見て、そこに伝染性を確信したのである。しかし、彼は結核菌の純粋培養をしなかったため、科学的実験の方法を取ったドイツの細菌学者コッホにその名誉は与えられた。しかし、コッホが一人で結核菌を発見したのではなく、ヤーコプ・ヘンレの3条件(後にコッホの3条件と呼ばれるようになったが)、顕微鏡の倍率の増加(800倍を超えて初めて見るようになるようになった)、染色技術の開発(結核菌は染めなければ見ることはできな

い)、細菌学の進歩が相まって、ついに1882年ドイツの細菌学者コッホによる結核菌発見に至ったのである。

しかし、ツベルクリン反応やX線による結核の診断が確立するまでにはまだしばらく日にちがかかった。清浄な空気と高山の低気圧によって肺病を制圧しようとする試みが続けられた(open-air treatment)。他方、低地のサナトリウムも繁盛した。医師の監督の下、栄養と安静で治癒を得ようとする試みだった(rest cure)。医薬ではなく、呼吸法と栄養で治療しようというのは、薬や手術が効果のないことを悟った、ある意味で医学のニヒリズムを象徴していた。

そうして、遂に1944年に結核に効果を示す抗生物質ストレプトマイシンが開発されたのである。

3. 病気の美化：結核のロマン化という問題

古来、たいがい病気は苦しく、美しいものではなかった。しかし、梅毒の例外は別にして、結核は美と才能の病気と考えられた最初のものだった。(癲癇 epilepsy が神聖病と考えられたことはあったが)。

なぜこのような病気にまつわる神話化が楽々と進んだのであろうか？ 佳人薄命と天才というのもしばしば結核に結びつけられた考え方だった。

その原因としてまず考えられるのは、病人として治療に専念できたのは特権的患者だけだったということである。彼らは、人里離れた美しい病室で栄養豊富な食事を摂り、無為の日々を過ごした。才能有る者ならば、誰に邪魔されることも無くその実力をいかんなく発揮できる環境にあった。考える時間は無限にあったし、また午後から出る微熱がその創造力を掻き立てたと考える者もあった。医師の中には、結核菌が発する独特の毒素が、彼等の想像力と創造力を刺激したと主張する者もあった。

第一、結核は長期間にわたって痛みが少なく、死の直前まで澄明な精神状態を保てるのだった。それは、まさに思索し執筆する、あるいは芸術作品制作に没頭できる状況だった。

英国がちょうど結核の死亡者数がもっとも多かった18世紀末から19世紀初頭はまた、ロマン主義の時代でもあった。人々は過剰な情熱を持って余し、革命の本義に身を殉じた者もあった。恋や愛に身をやつすことが賞賛され、華麗な奔放さが力を持った時代だった。英国の少年詩人チャタートン(Thomas Chatterton, 1752-70)がわずか17歳で膨大な詩を残して自殺した時、人々は才能ある者の「早世、若死」という甘い神話にたぐり寄せられ、若くして死ぬ結核患者をそれになぞらえたのである。

また、結核患者が示す様々な症状も、美への印象を強めたに違いない。いわく蒼白の肌、窪んだ大きな目、光

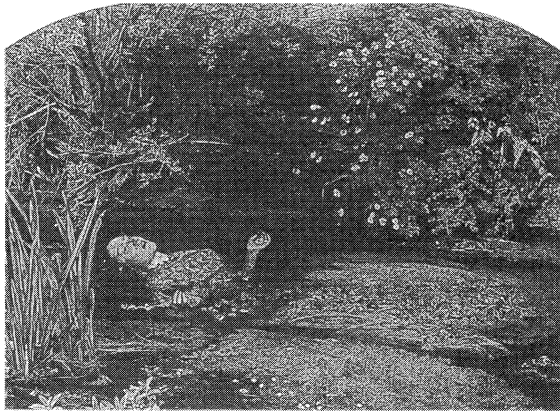


図2 ミレー「オフェリアの死」

り輝く目、伸びた首、落ちた肩、痩せた身体、力なげで物憂げな所作、飛びきりユニークな頭脳、微熱で赤らんだ頬（わざわざラテン語で、「肺病病みの希望」 *spes phthisica* と呼ばれた）等々。

そうした印象が、絵画に描かれ、詩に歌われ、小説に書き出され、誰も不思議に思うことがなかった。結核の世紀がやってきたのである。

美人のタイプも、ふくよかで肉感的な女性から、物憂く、痩せて力無げな女性が称讃されるようになった。女性の美人タイプも大きな変化を蒙ったのである。

こうした極端なイメージが先行したのが、ラファエロ前派の人たちで、それはその時代以前に見られたカリカチュア（諧謔絵）のローランドソン（Thomas Lowlandson）やドーミエ（Honoré Daumier）の絵の中に如実に示されていた。

死というイメージが如実に見られるのは、たとえばミレー（John Everett Millais）の描いた絵「オフェリアの死」（*Ophelia*）である（図2）。シェークスピアの悲劇作品『ハムレット』に題材を取ったこの絵は、恋人ハムレットの気心が知れなくなった乙女オフェリアが、岸辺に花を摘みつつ、つい脚を滑らせて川に落ち、今しも沈み死なんとする情景を描いている。このおどろおどろしい絵は、しかしその情景だけではなく、そのモデルも印象深い。モデルになっていたのは、後に詩人で画家のロセッティ（Dante Gabriel Rossetti）の妻になるエリザベス・シダール（Elizabeth Siddal）だった。彼女は、若い頃から肺病を病み、痛み止めの麻薬を常用していたが、その美しさは比類がなく、ボティチェリが描いた女神「ヴィーナスの誕生」の絵のモデルであるヴェスプーチ（*Simonetta Vespucci*）を想起させたが、それは偶然のことではなく、まさに女神に瓜二つのモデルを探しだしたのだった。28歳で亡くなったこの女神は、また肺病による死だった。ロセッティは、友人の詩人で工芸家のモリス（William

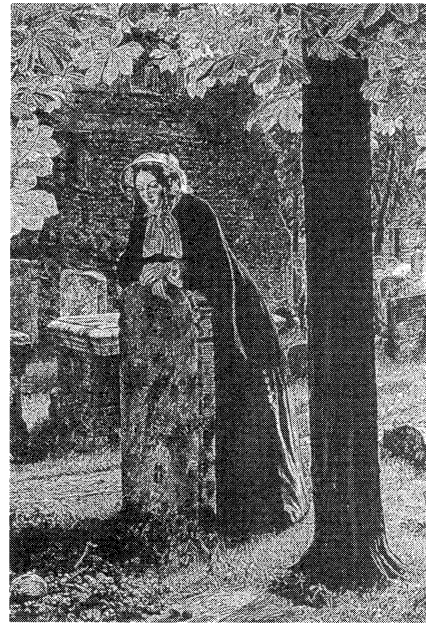


図3 バウラー「疑い」



図4 ランクリー「古い学友」

Morris）の妻ジェーン・バーデン（*Jane Barden*）をも描いていて、彼女もまた結核を病んでいたのである。

死が愛好されていたことは、たとえばバウラーの「疑い」という絵でも知れるように、未亡人や墓場の絵が愛でられ、応接間の真ん中で堂々と飾られたのである（図3）。さらに黒服で喪に服している若い未亡人の絵が愛好されたのは、単に世に肺病患者の死者が溢れていたというだけの理由ではないだろう。そこには死とエロティシズムの問題がある。それは、14世紀から15世紀にかけて、黒死病（ペスト、*Black Death*）が猖獗を極めたとき、若い乙女と踊る骸骨の絵、「死の舞踏」（*the Dance*



図5 ウィンダス「遅すぎた」

of Death) が流行したことに無関係ではないだろう。

いつも乙女や若い未亡人ばかりが主人公であるとは限らない。たとえばランクリーの絵、「古い学友」の中では、病気で零落した古い友人に、裕福な学友がこっそり金を握らせている。そこには、もうすぐ未亡人になるかも知れない若い妻がそっと寄り添っているのである(図4)。

肺病が極端な形で表象されているのが、ウィンダスの

「遅すぎた」という絵であろう。かつて恋人を放って去った男が、今再び恋人の元に戻ってみれば、彼女はもう肺病の末期段階で、痩せ衰え、杖を突いて自らを支えている様である。もうその虚ろな目は遠くを、ただ死だけをしか見つめていない(図5)。

こうした、美的な結核のイメージは、多くの国で見られたもので、国境や人種を超えたものであることが分かる。日本、韓国、中国、インドでも似たような現象が共通して見られた。

4. 結核、今後の課題

結核は、なお猛威を振るっている病気である。

かつて医師までが結核のロマン化に貢献したが、今はそうしたイメージも消滅しつつある。医師の診断訓練(たとえばX線写真の読影の再教育)に加えて、家庭内感染、学校内感染、職場内感染へ注意を怠りなくすること、DOTSへの患者の協力を引き出す努力等も必要である。また、この結核という病にまわりついている一種異様な美化の払拭もいるだろう。新薬の開発も視野に入れるべきだろう。

その上、国や社会がこの病を軽視せず、怠りない予防と治療、治療法の開発、患者の指導が、結局はこの病を防ぎ、絶滅する唯一の方法なのである。

加えて、先進国と発展途上国との経済的格差、医療格差、教育格差までを無くしていく努力が、結核には大きな意味を持つだろう。

← The 79th Annual Meeting Special Lecture →

A CULTURAL HISTORY OF TUBERCULOSIS

Mahito FUKUDA

Abstract Tuberculosis (TB) has a long history. Regarding terminology, TB has, roughly speaking, three stages. These are, PHTHISIS, CONSUMPTION and TUBERCULOSIS. Each stage has its own meanings and characteristics. In the second stage consumption, TB was thought to be responsible for the patients' beauty and creativity. This kind of romanticization can be seen both in the West and East, not only in literature but also in paintings.

Key words: Tuberculosis, History, Romanticization of diseases, Early death, Beauty, Genius

Graduate School of Languages & Cultures, Nagoya University

Correspondence to: Mahito Fukuda, Graduate School of Languages & Cultures, Nagoya University, Furo-cho, Chigusa-ku, Nagoya-shi, Aichi 464-8601 Japan.

(E-mail: mfukuda@lang.nagoya-u.ac.jp)